



平年より1週間遅れで始まった小豆の収穫作業

十勝管内の昨年のビート作付面積は2万5065ヘクタール、生産量は168万4191トン。全道の4割超を占めている。

◆開始遅れるも「よく育った」 小豆

芽室町坂の上の中捨智也さん(48)は10日、エリモショウズの畑2.5ヘクタールで収穫をスタート。5、6月の雨不足や高温の影響などで生育が遅れ、刈り取り開始も1週間ほどずれこんだ。今年は同じ株でも成熟度の違うさやが混在しており、畑ごとの仕上がり具合や天候を見極めながら収穫の判断をしている。中捨さんは「干ばつだったことを考えると、よく育ってくれて収量は平年並みになった」と語る。

ホクレン帯広支所によると、管内の小豆の作付面積は今年、前年比で1割多い約1万4800ヘクタール。全道の7割を占める。収穫途中だが現時点で、作柄は平年並みの見通し。中捨さんも「3年前の台風や去年の不作があったけど、今年はおいしい小豆を届けられる」と話していた。

新品種ナガイモ「とかち太郎」手応え 収量1割増 JAかわにし 2019年10月12日

帯広市川西長いも生産組合(小泉裕亮組合長)は11日、JA帯広かわにし別府事業所で、栽培に取り組むブランドナガイモ「十勝川西長いも」の作況調査を行った。新品種「とかち太郎」の作付けが始まったことで、今年産の収量は平年比で1割増になると見込んでいる。

「とかち太郎」は1999年からJA帯広かわにしや十勝農業試験場などが収量の高位安定化を目的に、共同で開発・研究を進めた。今年から2カ年で切り替える予定で、従来品種と比べて直径が1センチほど太い。切り替え後の収量は2割増となる見通しで、増える輸出需要に対応する。

今年産は管内9JAの264戸、550ヘクタールで栽培。秋掘りされるナガイモのうち5割ほどが「とかち太郎」に切り替わった。JA帯広かわにしでは10アール当たり収量を、平年比1割増の3864キロと見込んだ。「とかち太郎は胴回りが一回り大きかった」と評した。

調査は年間の出荷計画に役立てるため、例年収穫を始める半月ほど前に実施している。JA帯広かわにし管内の25カ所の畑から20本ずつ掘り出したナガイモの形や重さを、生産組合の幹部らが確認した。

収穫は11月1日から始まる予定。小泉組合長は「今年

は台風や大きな雨がなく順調に生育した。『とかち太郎』は従来品種より収量がアップする手応えをつかんだ」と話していた。



ナガイモの状態を確認する組合員ら

ビート糖度16%後半か 気温影響17%届かず 今年産見通し 2019年11月23日

10月中旬から管内製糖工場で受け入れが始まった今年産ビートの糖度は、16%台後半が見込まれている。過去2年間は17%台を維持したが、秋口の寒暖差が少なく、収穫期の雨が続いたことが影響した。ビートの生育自体は順調だったことから、生産量は昨年より微増となる見通し。

ビートは砂糖の原料で、糖度は収量と併せて農家の収入になる。基準の16.3%を超えて高いほど国からの交付金額が増える。

管内の平均糖度は、台風など天候不順に悩まされた2016年産は16.3%にとどまったが、17年産は17.2%、18

年産は17.3%と2年続けて17%を超えていた。

管内で収穫されたビートの約6割を受け入れる日本甜菜製糖芽室製糖所(芽室町)では、10月12日から製糖作業を開始。糖度は現状、昨年の水準に届いておらず、17%台に乗るか微妙な状況だ。